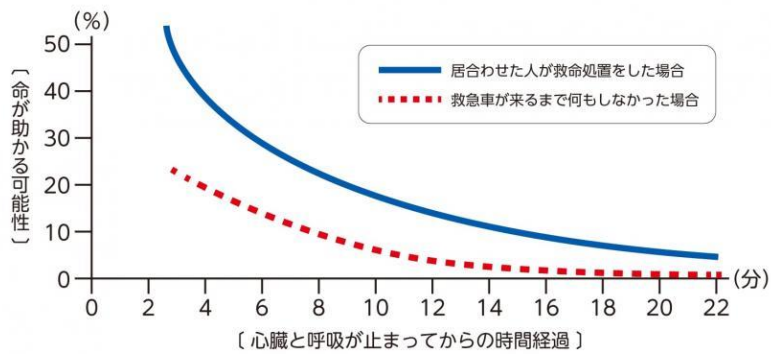


## 救急法を実践する際の心得

- ・自分自身の安全を確保すること。周囲の状況を確認し、二次事故（災害）の防止に努めます。
- ・あくまで医師または救急隊などに引き継ぐまでの手当てにとどめます。
- ・必ず医師の診療を受けることをすすめます。

## 救急の連鎖



(Holmberg M: Effect of bystander cardiopulmonary resuscitation in out-of-hospital cardiac arrest patients in Sweden. Resuscitation 2000; 47(1):59-70. から一部改変)

救急車が要請を受けてから現場に到着するまでの平均時間は9, 4分です。一般市民による一次救命処理が行われることが重要です。

## 傷病者の観察

## ①反応の確認

耳元で大きな声をかける。軽く肩を叩く。(乳児の場合は足の裏を叩く。)

## ②目の状態を調べる。

瞳孔の状態や目の動きを観察します。

## ③呼吸の状態を調べる。

傷病者の口・鼻に救助者の耳・頬に近づけ、目を傷病者の胸

## ④顔色・皮膚の状態の変化

顔色や手足の色などを見ながら、皮膚に触れて温度や乾湿の状態を調べる。

## ⑤手足を動かせるかを調べる

救助者の指を握らせてみたり、上肢・下肢を自分で動かさせてみるか調べる。

## 傷病者の対応(心肺蘇生が必要な場合)

## ① 傷病者の発見

## ② 周囲の状況の確認

## ③ 全身の状態の確認 (大出血などの有無)

## ④ 意識の確認

## ⑤ 周りの人に呼びかけ手助けを求める (AEDの準備、119への通報、周りの整備)

## ⑥ 自発的な呼吸の確認

## ⑦ 心肺蘇生、人工呼吸の実施